１　単元名「なんといったのかな」（お話の台詞を考える）

２　単元の目標

* 物語のあらすじに添って場面をイメージできる。
* 物語の場面に合わせて登場人物のことばを考える。
* 文に書かれていない心情やことばを考えることができる。

３　単元設定の理由

（１）自立活動の内容のうち、個別の指導計画を踏まえ、以下の具体的な指導内容を考えた。

※　自立活動の指導では、個別の指導計画に基づき、必要な内容を選択して具体的な指導

内容を設定することが必要。

＜聞く＞　　・話を聞いて内容がイメージできる。

・場の様子がわかる。

＜考える＞　・経験からイメージできることを細かく丁寧に表現する。

・相手の話を集中してきき、きき取った印象と自分のイメージをつなげ

ようとする。

＜話す＞　　・音韻を意識しながら話す。

＜読む＞　　・文を読んで、書かれている登場人物の動作や行動を理解する。

（２）指導観

　　　国語の読解の学習において、聴覚に障害のある児童達は文に表現されていない行間を読むことが課題に挙げられることが多い。人物の行動の背景にある状況や心情を推し量る場面で、持ち合わせている表現方法や一般的な知識情報が少ないと言われることがある。それらは、聞こえにくいことによって間接経験となる様々な情報を日常生活の中で得にくいことが一因かと考えられる。

　　　そこで、文章を読んだ時に、経験や知識と照らし合わせて状況をイメージし、ことばで表現する活動を取り入れ、動作化や台詞を考える楽しさを伝える。

（３）教材観

①「ももたろう」　　お話の流れがわかりやすく、おじいさんとおばあさんや、桃太郎と犬、さる、きじのやりとりをイメージしやすい。

②「おおきなかぶ」　国語で内容は学習しているが、文章では「○○をよびました。」としか書いてないため、そのときの気持ちやどんな言い方をしたのか考えることで経験とお話を結びつけてイメージを広げることができる。

（４）児童観

　　３名が在籍しており、中等度程度の難聴であったり、両耳人工内耳装用であったりするので聴覚口話を中心に授業を進めているが、日本語の語彙の獲得や文法理解にはそれぞれ差が見られる。

Ａ児：順を追って短く話されると内容を理解し、発音はまだ不明瞭だが適切なことばで伝えようとする。

Ｂ児：わかりやすいことばで話してもらうとイメージをつなげ、自分なりの言い方で一生懸命伝えようとする。

Ｃ児：大人が普通に話しても簡単な内容ならばすぐに理解でき、難しいことばを使うこともある。

話の聞き方や表現力はさまざまである。しかし、教師の話を聞いたり絵本の読み聞かせをきいたりすると、それぞれが自分のもったイメージを口にして意欲的に伝える姿が見られ、友だちの話を聞いて考える力も育ってきている。その姿を認めながら、登場人物の台詞を考えたり動作化したりすることを楽しむことで、自分なりのイメージを確かめ、お話の内容を深められると考える。

※　動作化を通して、文章の意味理解を促す。

４　学習計画　　全５時間（本時　４／５時間）

※　意味理解ができているか。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 学習活動 | 指導 | 評価 |
| 第１  時 | みんなで一緒に、「ももたろう」の１場面、２場面、３場面の絵を見て、おじいさんとおばあさんの台詞を考える。 | ・絵に合わせて気持ちやことばをイメージできるように、一人一人動作化する。  ・文法的な間違い以外は、それぞれの考えを認める。 | ・絵に合わせた台詞を考えることができたか。  ・動作化を手がかりに適切な台詞を考えられたか。 |
| 第２時 | 各自で、「ももたろう」の４場面から９場面(最後)の絵を見て、登場人物の台詞を考える。 | ・一人一人に絵を用意し、教師とやりとりしながら場面の動きや台詞を確認する。 | ・お話の展開にそって、「きびだんごをください」、「おにをやっつける(おに退治)」等、内容に合った台詞を考えることができたか。 |
| 第３時 | 各自が考えた台詞の入った絵(絵本)を発表し、きき合う。 | ・同じ絵でも、自分と違う友だちの考えも認め合えるよう、それぞれの良いところを褒める。 | ・気持ちを込めて読むことができたか。  ・友だちの考えをきいて感想を持てたか。 |
| 第４時  ・  本時 | みんなで一緒に、「おおきなかぶ」の登場人物の台詞や気持ちを考える。 | ・かぶが抜けなかった時の、それぞれの気持ちを考える。  ・「よびました」のところは、具体的にどう呼んだのか考える。 | ・絵を手がかりに「こまった」ので「たすけをよぶ」ことを表現できたか。  ※　他者の考えも認めることが  できるようにする。 |
| 第５時 | できあがった絵（紙芝居）を読んだり、劇遊びをしたりする。 | ・みんなで考えた台詞を用いてお話を読めるように、紙芝居にしておく。  ・教師も役に加わって、劇遊びを楽しめるようにする。 | ・イントネーションに気を付けて台詞をはっきり読めたか。  ・自分の好きな役を選んで劇遊びを楽しめたか。 |

５　本時の目標

　　Ａ児：お話のファンタジーを受け止め、犬やねこ、ねずみの台詞も考えることができる。

　　Ｂ児：自分の生活と結びつけて、おじいさん、おばあさん、まごの具体的な台詞を考えることができる。

　　Ｃ児：物語のあらすじを話すのでなく、登場人物の気持ちから台詞を考えることができる。

６　本時の展開

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 学習活動　　　発問 | 支援・指導　　◎評価 | 教材・その他 |
| 導入  5  分  ※　登場人物の気持ちを推測する場面  を意図的に設けていくことが大切。  展開  30  分  ※　それぞれのいったことを  それぞれの立場で考られてい  るか。  まとめ  10  分 | １.本時の課題を確認する。  「おおきなかぶ」のお話を  考えよう。  ○「なんといったのかな？」  ２.おじいさんの「いったこと」を考える。  おじいさんはどうおもったの  　かな？  ３.おばあさんの「いったこと」を考える。  ○「まご」とは呼びかけないことを確認する。  ４.まごの「いったこと」を考える。  ５.犬の「いったこと」を考える。  ６.ねこの「いったこと」を考える。  ７.ねずみの「いったこと」を考える。  ８.お話の流れで本時に考えた台詞を振り返る。 | ・絵本のさし絵と吹き出しカードを提示し、台詞を考えることを確認する。  ・さし絵から「いったこと」(台詞)が出ない時には、動作化して、かぶがぬけないおじいさんの気持ちを考える。  ◎かぶが抜けなくて「こまった」ことを表現できたか。  ・生活の中では名前で呼ぶが、絵本では名前がないので、想像できるように例を出す。  ◎「○○ちゃん」などの呼びかけを考えることができたか。  ・おじいさんやおばあさんの言い方とは違うことを確認し、それぞれの特徴が出るような言い方を考える。  ・動作化をして楽しく考える。  ◎女の子の言い回しや、犬なら、ねこなら、ねずみならと想像して考えられたか。  ◎声に出してはっきり言うことができたか。  ※　想像できるように  さし絵を使う。 | 絵本のさし絵（拡大したもの）  吹き出しカード  おおきなかぶ  さし絵  さし絵  さし絵  さし絵  さし絵 |

７　板書計画

　　　　　　　 　　 　なんといったのかな？

おじいさん　おばあさん　 まご　 　いぬ　　　ねこ　　　 ねずみ



　　　　　　　　　　　　　　　　　　＊　絵は、絵本のさし絵から他にも用いる。

８　資料

　　・児童から出された意見は、吹き出しに書く。

　　　　　　　　　　　　　　おもったこと　　　　　　　　　　いったこと

　　・手がかりにするさし絵を拡大して用意しておく。

９　授業を振り返って～授業で大切にしたいポイント～（仮題）

* 自立活動の指導で言葉のきまりを扱っておくと、ほかの教科などに有効に使えると考えている。

※　思考力・表現力の基礎・基本を育てる。

* 言語活動（助詞の扱い）

・小学部段階では、児童が確実に身に付いていることばには、表現の仕方を意識させること（気を付けて読む）、口声模倣やドリルをかけ習熟を図っていくことが大切である。

・児童の誤りを指導者が指摘する場合、必要に応じて、その違いを本人にも伝えておく必要がある。例えば、「そばで箸を食べる」と「箸でそばを食べる」といった事例を出すことで、児童なりのイメージを確実にもたせることが大切である。

・助詞は自分で気を付けないと改善が難しい。本人が「どうしてかなー」と、気付いたり、考えたりする機会をもつことが重要である。

※　子供の気持ちに即して活動を展開する。

* 言語活動（「聞く」ことの扱い）

・学級の児童は、隣の子を見る習慣ができているので、相互に話の内容をチェックさせる。

・話題が横道に逸れた時、指導者として、児童たちに「どうしてやりたいの」と尋ねたくなる場面がある。そのような時に児童の気持ちに即して活動を展開する。これが、自立活動の特徴である。

※　言語活動では、発達段階に応じた「読む」活動を取り入れる。

国立特別支援教育総合研究所

交流班の定岡です。

この度はお忙しい中、ご都合をお知らせいただき、

ありがとうございます。

研究協力者のみなさまのご都合が集まり次第

確定したいと思います。

少しお預かりさせてください。

引き続き、よろしくお願いいたします。

* 言語活動（「読む」ことの扱い）

・児童は文字を読んでいるが、読み方やスピードなど、気を付けて読むことを適宜、指摘し、「ここは気を付けて読もう」とか「もう一度、読んでみて」といった活動を取り入れることが大切である。

・自立活動は基本的に個に応じるものであるから、個々の児童の状態に応じて、口慣れさせたところ、ドリルをかけていくところと使い分けることが大切である。

※　自立活動は、個に応じたねらいに沿って進めていくが、場面に応じ

て「アドリブ」（機転）を利かし、印象に残る活動にすることが大切。

* 言語活動（「話す」ことの扱い）

・Ａ児が、「とてつもなく」を「たちつてと」と言った場面があった。Ａ児は「さかさま」と言われても、理解できないことがあるかもしれない。そのような時、指導者（ＴＴ）が入ってあげて、「さかさま」という言葉を書いてあげると、楽しい言語活動になる。

・言語力を育てるための自立活動として、「アドリブ」（機転）が入っても良い。

※　視覚的に違いが見えて、考えやすくする。

* 教材活用

・指導者は、意図したことと児童に考えてほしいことを二種類の吹き出しを描きだしていた。雲みたいな吹き出しと、普通の吹き出しを、個々の児童に徹底して扱うと、児童にとって、その違いが見え、考えやすくなる。

※　生活場面における状況の把握や理解を促すための具

体的な指導の手立てや工夫が必要。

* 指導内容

・聾学校の自立活動は、指導者が児童の頭の中をどこまで想像して、一緒に取り組めるかを考えることである。

・話題が、横道に逸れても良いと判断した場合、徹底的に逸れるべきである。しかし、必ず、指導のねらいに立ち戻ることが大切である。

・国語の時間は、国語の読み取りでねらいを達成するため寄り道ができない。しかし、自立活動は、児童の頭の中を作る、子供の思っていることに沿いながら指導していく活動であると捉えることが大切である。

※　TTでは、必ず事前に役割分担を明確にして指導する。

* ＴＴによる指導

・授業で指導者が、説明し、書いたり、動作化したりするなどを全部行うことは無理がある。TTでは、各指導者が、事前に役割を決め分担して指導することで効果が上がる。

・一人の指導者が説明し、もう一人の教師が黒板に書く。あるいは、一人の指導者が、ときどき黒板に間違えて書いたり、空欄をつくったりして書くと、児童はより一層関心をもって、指導者の話を聞いてくれたり、考えてくれたりする場合がある。児童の引き付け方を工夫することが大切である。

* 児童の反応

本時の題材である、「おおきなかぶ」では、児童が「びっくりした」と表現した場面があった。指導者は、児童に対して、「びっくりした」理由を考えさせることが重要である。これが、その児童の心の動きや考えを掴むきっかけになると思われる。指導者が、教材（本）のページをめくると、小さいかぶから、急に、大きなかぶに変わった。このように児童は、指導者が一枚ページをめくるだけで、「すぐに」大きくなったからびっくりしたということなのか、それとも、「大きさ」にびっくりしたのか、その辺りを児童に確かめ、考えや思いを表現させることが、「行間を読む」ということに繋がると考えられる。この他、児童には最後まで話し切らせる時間を作ることが大事である。当然、児童は間違えることもあるが、児童に表現させたり、指導者が子供の意を汲んで、まとめたりしておくと、落ち着いて活動に参加するようになると考えられる。

※　子供の「驚き」「喜び」などの原因や理由を考えさせる。こうした心の動きを言語

化することにより、子供自身の「ことば」を育て、いわゆる「行間を読む」ことに

もつながる。

* 自立活動でねらうこと

自立活動の指導としてのねらいは、国語科等の教科では扱えない独自のねらいがある。具体的には、自立活動は、聴覚障害の児童一人一人に不得手なところがある。これを改善するために様々な活動を工夫したり、ねらいを設定したりすることが大切になる。

実際の指導に際しては、指導者が適宜、アドリブを利かせることは、児童に指導者がねらったこと（考えさせたいこと）を気づかせる契機となる。また、指導者が意図的に間違えると、児童の印象に残るので、指導技術の一つとして押さえておく必要がある。

※　教科学習では、主として教科のねらいの達成を目指し、自立活動では個に応じた発達段階

を踏まえ、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握等、個のねらいに即して指導して

いく。